
シンポジウム 2

アディクションとトラウマ

－支援者が気づくことの意義と気づいた後にしたいこと－

●シンポジウムの趣旨

アルコール、薬物やギャンブル等、様々なアディクションに対して、多くの人々が理解を深め、様々なアディクションがあっても、回復を目指すことのできる街を作るための普及啓発事業が全国的なひろがりを見せている。アディクションを根性論や自己責任論で理解するのではなく、適切な理解がひろがり、アディクションがあっても孤立せず回復を目指すことのできる街が増えていくことを願うばかりである。しかし肝心の精神科、心療内科等の医師や看護師、心理士のアディクションへの理解が乏しいために、せっかく医療機関や相談支援機関につながっても、継続的な支援に至らないことがある。「飲んできたなら今日の診察はこれまでと帰された」「尿検査で陽性なら通報すると言われた」と、来院した人から耳にすることは今もある。たしかにアディクションのある人は支援する人を裏切るかのように振る舞うことがある。だがアディクションからの回復のために大切なのは、治療・支援から脱落せずつながり続けることである。支援する人がアディクションのある人を突き放した結果、治療・支援からの脱落、そして病死、事故死、自殺という最悪の結末にいたることは稀ではない。支援する人に必要なのは、アディクションが生じる過程、アディクションのある人が呈しがちな態度と行動に関連しているトラウマへの気づきと、トラウマインフォームドアプローチの理念に基づいた対応である。1998年、Felittiらは小児期のトラウマが、アルコールや薬物の使用障害が生じるリスクとなりうることを初めて疫学的に指摘した。以降、小児期のトラウマの蓄積が様々なアディクションのリスク要因になることについて、数多くの疫学研究が蓄積されてきた。本シンポジウムではアディクションとトラウマの関係について整理し、アディクションのある人を支援する時にトラウマに気づくことの意義、トラウマインフォームドアプローチへの理解に基づいた対応と、今後求められることについて議論する。